

会員 築地宜雄氏の逝去



築地宜雄氏

本会会員築地宜雄氏は昭和45年(1970)7月9日午後1時20分に老衰のため静かに逝去された。享年88才。

築地宜雄(以下敬称略)は明治16年(1883)5月30日に熊本県玉名郡大栄村永塩に生れた。明治39年(1906)に第五高等学校から東京帝国大学理科大学実験物理学科へ進み、明治42年(1909)2月に同大学を卒業、同年9月20日に中央气象台に技術見習講師として勤務し、翌明治43年(1910)5月10日に長崎測候所長に任ぜられた。郷里に近く、文明開化の匂いのある長崎で、新鋭青年所長となった築地は業務のかたわら多くの研究を行なった。長崎の風速変動(1960)、台北の地中温度(1511)、熱伝導と土壌含水量との関係(1912)などについての理論的な研究をすべて英文で発表し、また長崎港の潮汐予報についての研究(1911)を発表している。

長崎では、自然を観察する機会に恵まれていたために、不知火、花ボロ、鳥、魚などについても気象学的な研究をして発表している。

明治43年(1910)9月5日の日記によれば、この日に島原城跡で不知火を測量用トランシット、写真などで観測して漁火と断定したとある。その後も研究を続け、誰よりも早く、不知火は漁火であるという報告書を長崎県知事に提出したところ、当時は不知火の神秘性の失なわれることをおそれて、同県の総務部長にしかられて、この説はほおむられた。

長崎測候所は鳥や魚を観察するうえに地の利を得ていた関係から、これらについて気象物理的な観察をして、気象集誌に飛禽游魚私見として明治44年(1911)と明治45年(1912)の2回にわたって発表している。この論文では、候鳥と風の関係、飛ぶときの風息と重力の利用、鳥と空気および魚と水の物理的關係などを論じている。なかでも、トビの廻転週期は約15、6秒で、尾を動かして30秒ごとに一上一下して、垂直面内に一種の波形を描いて風より早く前進することなど興味あることを明らかにしている。また当時調べた温泉(雲仙)嶽の花ボロと木花については後で気象集誌(大正2年、1913)に発表している。

長崎測候所長在任はわずか1年余で、大正元年(1912)12月10日に上田蚕糸専門学校の教授となる。上田蚕糸時代には、水平暈の現われる条件についての詳細な観察を気象集誌(1917)に発表し、また養蚕季節における東北の気候について研究し、上田でも花ボロ、木花についてさらに研究を続けて、霧氷の生成と結構に就てという論文を気象集誌(1923)に後で発表した。当時は養蚕が盛んであり、桑が霜害をしばしばうけたので、霜害についてはかなり研究したようだが、これらの研究はとりまとめて発表されなかった。

上田蚕糸専門学校教授の在任期間は7年余で、大正8年6月11日に再び中央气象台の技師に任ぜられた。築地が中央气象台へ転動してから昭和の初年にかけては、欧米諸国へ視察に出たり、ちょうど測候所の新設時代でその用地の選定に東奔西走したり、その間、関東大震災があったりしたためか、研究はややとだえている。このころ発表した論文には、陣風線の解説、生物と気象との関係(日本学術協会報告、1926)、家蚕の脈搏の観察(農業及国芸、1926)などがある。また深浦文雄氏の尿生成や耳迷路についての理学的研究に協力している。築地がこのころから、生物の生理と気象との関係についての研

究に興味をもつようになったのは、上田蚕糸専門学校に勤務したことが多大に影響したものと思う。

欧米各国への出張は、大正10年(1921)10月13日に命ぜられ、11月9日に日本を離れ、翌年8月26日に帰国したもので、出張報告を欧米諸国気象通報の近状として気象集誌(1922)に書いている。この視察は日本のその後の気象事業のゆきかたに大きな示唆をあたえているように思われる。

アメリカでは多くの観測所が気象局直営になっていることが書かれていて、これはその後の日本の気象官署の国営移管の機運の醸成に影響したものと思われる。またアメリカでは観測所、飛行機、気球などの観測結果が45分後に気象局に集まり、その後1時間で各地でこれらの観測結果を知ることができるし、イギリス、その他の国では観測後1時間で天気図を作成しているが、日本では観測結果が集まるのが、内地では2時間、台湾、朝鮮、満洲の分まで揃うには3時間もかかり、観測結果を速報することの重要であることを指摘している。これはその後の気象通報の改善・拡充に少なからず寄与しているものと思う。

築地はこのころ、ツェッペリン伯号世界一周飛行、タコマ市号太平洋横断無着陸飛行などに航空気象担当者として尽力した。

築地の生涯での本格的な研究は昭和に入ってから行なわれた。なかでも最も秀でた研究は電線の唸りについての研究で、今でもこの種の研究としては高く評価されている。この研究は、気象集誌(1930~1931)に5回にわたって、通して121頁に及ぶ大論文である。電線が唸りを生じるにはある程度以上緊張していることが必要であり、唸りを生じる電線の振動は張力と弾力との協同作用による振動であることを実験と理論により明らかにし、電線の唸りと気象との関係、線の太さと長さの関係、振動の量的吟味、振動勢力の消長、張線より空気の振動勢力への移行、誘発作用の漸変、横振動、縦振動による唸り、電柱の振動との交渉、電線の振動と電流の動揺との関係などについて究明している。これらの研究は、実験と理論とを併行して、築地特有の手堅い研究の手法で行なわれている。非常に優れた研究であるが5報の最後で未完となっている。これはさらに研究を続ける意志があったことを意味するものと思うが、なぜかその後発表されなかった。公職を退いた老後にまとめたが、これが世

に出なかったことを非常に残念と思うが、そこに築地らしい風格がしのばれる。

その後も築地は風に関係のある研究に熱意を示し、風杯型風力計の一説とその係数(1932)、野外に於ける測風気球上昇速度(1933)という論文を気象集誌に発表し、引続いて風杯型風力計の新観察と題して3回にわたって気象集誌(1933)に発表している。

これらの一連の研究は、風杯型風力計を用いる上に実用的にも寄与するところの大きいものであった。築地はこれらの研究を行なうかたわら、気象の生物に対する影響について依然として大きな関心を持ち続けて、気管支性喘息発作と気象との関係についての杉原仁彦氏の研究に協力し、昭和11年(1936)には生体に対する気象的刺戟の根本概念について講演し、日本温泉気候学会誌に発表している。築地は昭和に入ってから、中央気象台の航空気象係長、農業気象係長、産業気象係長(現在の課長相当)などを歴任し、生物季節(開花予想)や農業気象の先駆者でもあった、またこの間、東京大学農学部、海軍大学校などの講師をした。昭和15年(1940)2月2日に長い間の中央気象台の勤務から、文部省に転出、専門学務局科学課長となり、約2年間、戦時中の文部省の科学教育行政に尽力した。昭和17年(1942)3月31日に松本高等学校の校長となり、終戦を迎え、昭和20年(1945)11月24日に退職して郷里の熊本県に帰り、熊本短期大学、熊本商科大学などで86才の高齢にいたるまで講義を続けた。

築地の学究態度は慎重で、自分になっとくできるものでなければ発表しなかった。逝去される前年くらいまでも、これから研究するのだとしばしばいって、筆者に資料の送付を依頼してきたほどで、死に至るまで学問の道を忘れなかったことは、吉田松陰を思わせる。

今は多くの未完成な研究ノートが淋しく主のない机上に積まれている。中央気象台時代の築地を知る人は、公式の場所でしばしば式辞を述べた姿が今なお臉に浮ぶと思うが、古武土的な毅然とした態度はこのような場所に実に適任であった。態度だけでなく、築地は正義感が強く、少しでも曲ったことはきらいで、このために生じる幾多の苦悩にじっと耐えて一生を過ぎてきた態度は敬服に値する。ここに慎んで冥福を祈りたい。

(1970 VIII-31 大後 美保)